18
汚染された海

目次

＜ 魔人 ＞ ..... 魂神

4p ～ 11p

＜ヒトガタ＞ ..... 黒司

12p ～ 23p

魔人

魔法騎士は自らが生み出した闇に敗北した。
闇の名はノヴァ。表の世界を生きる魔法騎士達は自分たちのような影の存在を気にも留めず、のうのうと暮らしてきたのだ。だが、今日からは違う。自分が表の世界に踊りだし、代わってこの魔法騎士達は自らの下僕となって生きることになるのだ。
そのノヴァが見つめる先に魔法騎士達はいた。透明なカプセル状の卵の中で、一人は満たされた液体の中に漂い、一人は懸命に卵を破ろうと藻掻いている。無駄なことだった。
既に一人は魔法騎士の姿からはかけ離れつつあった。そう、それこそがノヴァがやろうとしている事。
「光〜、気分はどう？」
無邪気に問いかける先、獅堂光は虚ろな瞳のまま動くことはなかった。魔法騎士の鎧は生物のように変化しつつあり、身体と同化しつつあった。その姿は、どことなく魔神レイアースに似ている。
「もうすぐ私も魔神を持てるようになるんだから、もっと喜んでよね」
ノヴァが言う魔神。それは魔法騎士三人を守護するセフィーロの三柱であった。その加護を受ける魔法騎士以外の人間に、その力を行使することは出来ない。
そこで、ノヴァがやろうとしていることは、魔法騎士そのものを魔神とし、自らに忠誠を誓わせるというものだった。
「ま、選択の余地なんて無いんだけどね」
ニヤリと笑い、光の入っている隣のカプセルを見やる。
「ふざけるんじゃないわよ！」
龍咲海。魔神セレスの加護を受ける魔法騎士。その水龍の力も、このカプセルの中では行使することが出来ずに、ただただその壁を自らの拳で叩くことしか出来ない。
「光と違って、五月蝿いよ？　少しは自分の立場ってものを――」
「知ったことじゃないわ！　光をすぐに元に戻しなさいッ」
「あっそ……」
まるで海の言葉など意に介さずに微笑むノヴァは指を鳴らす。それを合図に、海のカプセルの中に臓物のような触手が満ちあふれた。
「きゃぁぁっ！！」
突然の触手の出現。それも足元から何本も伸びる触手に、海は全くの無防備だった。脚に巻きつかれ、両手を封じられ、狭い中でさらに身動きを封じられる。
「うっ……くっ……」
必死に逃れようとするが、触手は柔らかな弾力に反して強靭な力でそれを許さない。
「光は好きだけど、あなたは大っ嫌い。でも、これから好きになれそうかも」
「なに、を……ひっ」
海の無防備な股間に触手は触れた。魔法騎士姿のそこは、レオタードで守られただけの頼りないものだったが、それを打ち破るには相当な魔力、力が必要なはずだった。
「あはははは！　魔神の加護が届かないんだから、もうその衣装はただの布切れ同然なんだよ！」
慌てふためく海を見て、ノヴァは嘲笑したのだった。

「ひっ、や、やめっ！！　うっ」
レオタードをずらし、顕となった海の秘所。触手達は何の前置きも無く我先にとそこへ潜りこみはじめた。
「ひぁぁぁっ！！」
情けない叫び声を上げ、海は触手の蹂躙にされるがままだった。
「ひぎぃ！　ぬ、いてぇ！！」
だが、ノヴァは微動だにせずに、薄笑いを浮かべながらそれを眺めるばかり。触手には言葉など通じるはずもなく、無駄な願いという他無かった。
「いた、い……ッ！　痛いぃ！！」
初めて迎え入れるものが、人外のものであり、それも許容量を超えたものだった。
「おね、がい、抜いてぇ……」
みるみると腹が膨れ上がり、魔法騎士の鎧を押し広げていく。奥へ、奥へと進んでいく大量の触手。
「うっ、あぁぁぁぁぁッ」
腹部の下に熱い感触が広がる。快楽とは程遠い蹂躙。海はそこに放出された体液の熱でさらに叫び声を大きくした。それだけが、海にできる唯一の許された行動だった。
（身体の中を、触手が、体液が――うぁ）
「ぐっ、おっ」
腹の底から、およそ普段の海が発することがないような低い声。上を向き、両目を見開き、海は身体の中から喉にかけて迫り上がってくる感触を覚えた。それは激しい嘔吐感。
「ぐ、ぶぉぉぉッ！！」
胃の内容物を交えて海の口から吐出される液体。触手が放出し続ける体液が、海の身体を巡り、今まさに海の口を出口として噴出した。
「げぼぉぉぉぁぁぁぁぁ！！！！！」
終わることの無い嘔吐。やがて純粋な触手の体液のみとなり、海の身体を管にして噴射するそれは、尋常ではない量だった。噴水のように海の口から噴き出した体液はカプセルの天井へと当たり、そのまま下へと流れ落ちていく。
「光の時も面白かったけど、あなたも最高ね」
すでにノヴァの声など聞こえる筈もなく、激しい嘔吐による苦しみで海の精神は崩れ落ちる寸前だった。目の前が真っ暗となり、自分が今何を考えているのかさえ解らず、怒涛のような嘔吐感にその身を流され、生きる噴水と化して体液を吐き出し続ける魔法騎士。
「ぐぼっ！　げぼぉぉぉぉぉ！！！！」
下品な声を発しながら、凛とした魔法騎士の面影さえ残さずに、自らが吐き出す液体にカプセルの中が満たされていく。それは足先を満たし、膝まで来る頃には三〇分を過ぎていた。
いつの間にか、ノヴァの足元には一匹の獣が四つん這いとなって、主人とともにその光景を眺めていた。
魔神の力をそのままに、自ら魔神と化した魔法騎士の成れの果て。獅堂光は魔人として、その強大な力をノヴァに使役される存在へと生まれ変わっていた。
「ほら、光……もう少ししたら、あなたと同じように生まれ変わっていくわよ」
「グルルルルゥ」
人間の言葉ではない獣の言葉で、それに応じる。主人に媚びた顔を向け、嬉しそうに擦り寄る。
「光はいい子だね。ご褒美のしがいがあるよ」

そう行ってノヴァは光に繋いだ鎖をぐいっと引き寄せた。光はそのまま、ノヴァの足先に接吻をした。
やがて、海のカプセルの中は、全て液体によって満たされた。

経過は順調だった。
カプセルの中で触手に固定されたまま、体液を流し込まれ続けて漂う海。思考は薄い靄がかかったように白濁し、自分がどういう状況で、何をされていたのかさえ思い出せなかった。ゴボゴボと時折聞こえるのは、海の身体から出る空気が抜けていく音だった。
(私……は……何をしていたんだっけ)
必死に思い出そうとしても、遠い記憶を探っているかのようでまとまらず、また集中すらも出来ない。
気付いてはいないが、その海の姿は既に魔法騎士――それ以前に人間のものでは無くなりつつあった。
魔法騎士の鎧そのものが肌と同化し、魔神セレス――水龍のような、言ってみれば爬虫類のような姿になりつつある。
ティアラの飾りは頭部から生えた角と化し、耳や鎧は水生動物のようなヒレへと変化していた。長い尻尾、肌の上に張り巡らされた鱗。龍咲海はもはや後戻りの出来ない状態へと自らの意思に反して踏み入れつつあった。
(そうだ……ここから、出なきゃ……)
モゾモゾと身体を動かしてみる。身体は拘束されておらず、満たされた液体の中で呼吸も出来る。秘所には触手が突き刺さり、絶え間なく液体を流し込まれているが、まるで苦しさを感じない。それどころか、自分が産まれた時から既に繋がっていたかのように違和感が無かった。
(でも、どうして出たく、無い……の)
心地よいとさえ思える場所。自分が変わりつつあることさえ気付かずに、海はこの満たされた液体の中で、緩慢な思考を繰り返し、惰眠を貪ることだけを続けていた。
しかし、それも永遠に続くことではなかった。海の入っているカプセルの前に現れたのは、憎むべき相手の筈のノヴァ。そしてそのノヴァによって姿を魔人に変えられた光だった。鎖に繋がれ、ノヴァの手に引かれ、まるで忠実な犬のように傍らで四つん這いになりながら海の姿を見上げていた。
「ねぇ光。もう充分だと思うんだけど、どうかな?」
「うぅ〜 わふん!」
人の言葉ではなく、犬のような言葉でそれに応える。
「うんうん、やっぱり光はいい子いい子。さて、と……この子はどうなったかな」
ノヴァが指を鳴らす。そのタイミングで、海の秘所に突き刺さっていた触手からの液体の供給が止まった。
(な、に……くる、しい……)
ゴボゴボと気泡を出し、海は虚ろな表情から一点して、一気に覚醒した。そして、そこで見たのだ。自分の身体が人間の物ではなくなっていることを。
「ゴボゴゴゴゴゴボォ」
(なによこれ!!? 私が、私の身体がっ)
「そうだよ、魔人になったの。私に仕える忠実な魔人にね」
(頭に、声が……?!)
「私には逆らう事なんて出来ない。強制的な契約なんだから」

海の頭に響く声。クスクスと笑うそれはノヴァのものだった。
（けい、やく……？　あなたが……ご主人、さま？）
身体の変化と共に、刷り込まれていた服従心。
（あれ、なんで……私は、人間……マジック、ナいと……）
「違う」
声は言い切る。
「あなたは魔人。魔神セレスの化身。そして、私の可愛いペットなの」
（あれ……さから、え、ない……）
「そうよ、逆らうことなんて出来ないわ。私の言葉は絶対。私の言葉はあなたの全て」
（ご主人、さま）
「そう、ご主人様よ」
ノヴァは海を見上げて満足気に頷いた。どうやら、魔法騎士を魔人にする改造は満足の行く結果だったようだ。
「さあ、出てらっしゃい」
カプセルの全面に縦の切れ目が入り、そこから大量の液体が流れ出してくる。その液体と共に、海も流れに紛れて外の世界へと躍り出た。
「シャアアアアアアアア！！」
声というよりは鳴き声に近いそれは、海の口から発せられた。首元まで届くような長い舌を伸ばし、四つん這いとなって長い尻尾を降る。瞳孔は人間のものではなく、獣そのものであった。
「おめでとう！　ようやく産まれたね」
流れ落ちた液体にブーツを濡らしながら、ノヴァは魔人となった海の元へと歩み寄ってくる。海はそんなノヴァを恍惚の表情で見つめていた。
（嗚呼、ご主人様だ……）
ノヴァに逆らう事など思いもよらない。むしろこれから自分を導き、自分が力を貸し、自分のこれからを全て決定してくれる存在なのだから。
「早速なんだけど、あなたが産まれたせいで汚いものが沢山足についちゃったんだけど……綺麗にしてもらえない？」
海がこれまで浸かっていた液体が床一面に広がっている。言うほど汚れてはいない足だったが、海は酷く申し訳ない気持ちになった。
「フシュルルルル……」
爬虫類のように舌で音を発し、海はいそいそとノヴァの足元へと近寄る。そして、その長い舌でノヴァの足を舐め始めたのだ。
「あははは！　いい子ね！」
舐めさせるままに、もう片方の足で海の頭を踏みつける。
「生意気だった魔法騎士がこのザマ！　ねぇ、今どんな気持ち？　ねぇってば」
グリグリと足で頭を踏み躙られているにも関わらず、海は恍惚の表情を浮かべたまま、懸命に主人の足を綺麗にしようと舐めることをやめなかった。
「これで、あと一人。どんな子になってくれるのかな」
ニヤリと口元を歪め、足元の海を見やりながらノヴァは最後の魔法騎士の捕獲に思いを馳せた。
そして、魔人となったもう一人の魔法騎士――光は、海の懸命な奉仕を羨ましそうに眺め、その口元から涎を垂れ流すのだった。

BAD　END

ヒトガタ

捕らえられた海は、憤怒の形相で私を睨みつけていた。

これだから魔法騎士を相手にするのは楽しい。

この生意気な魔法騎士を自分の下僕の一人として生まれ変わらせてあげる。

いつまでその虚勢が続くものか見ものだけれど、それも長くは続かない。

そう、私はどんな人間でも、どんな種族でも、思いのままにすることが出来る。

「この注射でね♪」

これ見よがしに注射器を見せつけてやると、初めてこの魔法騎士は表情を変えた。

「何をする気！？」

恐怖を打ち消そうとしてそんな態度を取っている。そんな動きが手に取るように解る。

見れば小刻みに身体が震えてるじゃない。

「あなたを覚醒させてア・ゲ・ル」

自分は決してそうはならない。そう強く思っている人間ほど、堕とし甲斐があるのよ。

「決して屈しないわ！」

ここでもお決まりの台詞だ。馬鹿のひとつ覚えみたいに、強がればどうにかなると思ってるのかしら。全く滑稽な姿よね。

「それじゃあ、ちょっと痛いけど、我慢してよね」

ゆっくりと注射器を近付けてやると、怯える自分を必死に抑えているのがよく分かる。

「っ……！」

腕に刺して、ゆっくりと麻薬を注入する。そう、打たれた者の欲望を増幅させ、精神を犯し、理性も知性も全て吹き飛ばしてしまうこの薬は、魔法騎士なんて使命に縛られたこの女を解き放つのにうってつけなのよ。

「う、うあああああああああっ！！」

さあ、よがりなさいな。

「あ、あぁぁぁぁぁッ！！」

目の前の魔法騎士が涎を流して絶叫し始めた。私は下僕に仕上げを命じた。

あのノヴァから注射を打たれた直後から、私の身体はまるで燃えているかのように熱を発し始めた。熱さはどんどん増していき、心臓の鼓動が大きく響く。

「はぁっ、はぁっ」

本当にクルクルと回っているかのように視界が歪んで回転する。

私は一体どうしてしまったんだろう。あの注射は、一体どんな効果があるんだろう。

「はむっ……んっ」

私はそう考えながら何かを口にくわえる。細長くて、先が蛇の頭のように膨らんだそれは、自分の目の前に突出された瞬間から不思議な香りを放っていた。

とりあえず口に含み、味見をして、そして口いっぱいに頬張る。なんて美味しいんだろう。これは一体何？　私は拘束されたまま、それを口に加えたまま、突き上げられる。

「むぐぅっ！！」

お尻の穴から脳天に電流が走ったかのようだった。なんて凄い衝撃なんだろう。

でも一　体何をされてるのか、私にはまるで解らなかった。

「ふっ！　むっ！　んんっ！　んぅ！！」

激しい突き上げの度に視界が揺れる。何も考えられない。しかしこの激しさの中で私はその身をただただ任せることにしていた。自分の身体が揺さぶられるごとに、脳を直接殴られているかのような衝撃が走る。身体の疼きが心地よくなり、熱さも決して不快ではない。

でも、これは一体何？　私はどうしてしまったの？　一体私は今どういうことをしているの？

「んぅ！　んふぅ！　ふっ、ふっ！」

激しく鼻で呼吸をし、口に物をくわえたまま喘ぎ出す私。

なんて激しいのかしら。こんな事は今まで一度だって無かった。身体がどんどんと高みへと上り詰めていくのが解る。

「んんんんんんんんんんんんッ！！」

私の視界は真っ白になり、そこで意識が途絶えた。

海と言ったっけ、この女。光のそばにいて、事あるごとに私の邪魔をしてくれた女。

それが今じゃこうして私の下僕に犯されている。

表情を見れば、自分が何をされているのか決して解っていないんだろうな。

「もう、いっか」

私は女の枷を外してやった。外しても逃げることなんて決して出来ないのを私は知っている。逃げるということを、既に放棄しているんだから。

今まさに、この女は下僕達のディルドーをその手で掴んでしごき始めてるじゃない。

「あはっ、あはぁ！！」

我を忘れて快楽という波に溺れていく魔法騎士。こうもあっさり過ぎると、まるで面白みがないんだけれど、まあ私の本命は光だから。

この女がどう堕ちていこうが、あんまり興味は無いんだけどね。

でも、娯楽が少ないんだから、少しは楽しませて貰いたいわね。

「はふっ、んぐっ、んっ、んんっ」

産まれたばかりの家畜が、母親のおっぱいを貪り飲むのってこういう感じなのかなってくらいに、必死でディルドーをくわえこんで吸い付いてる。この姿を最初の時に見せてあげたいんだけどなぁ。

そうだ、光に見せてあげようか。光は優しいから、きっと心を痛めるわ。

だって、私でさえ引くもの、これ。

「本当、人間って醜いわね……いくら薬の影響だからって、ここまでされたら、ねぇ？」

そう言ってやったけども、この女の耳にはまるで届いてない。

もう、自分の事も良く分かってないんじゃないかなってくらいに乱れてる。

「あひっ、ひぃぃっ！！」

下僕にお尻をほじくり回されて、おまんこを広げられて、動物みたいに四つん這いにさせられて、魔法騎士のプライドなんてもう微塵も残ってないじゃない。

あのマヌケな顔、これが本当にあの女なのかしら。

「ほんと、この薬って凄いわ……うふふ」

全く途切れることがない衝撃。私は必死になって自分のすべき事をして、委ねられることは委ねた。

さっきまで自分がくわえていたその長い物を手に掴んで、上下にこすってあげなきゃいけない。そうしないと、この自分を衝撃へと誘う人達を満足させる事なんてできっこないのだから。

でも、どうして私はこんな事をしなければならないの？

「はぁっ、いひぃぃ！！　はひぃぃぃ！！」

自分でも驚くくらいに叫んでいる。なんていう声を出してるんだろう。

それでも、これは嘘偽りのない自分の感情表現なんだから、仕方ないわ。

いつから自分はこんな事をしているのかも、どうでもいい。

必死にこの状況を乗り越えないと、頭がどうにかなってしまいそうだった。

腰自分の不浄だと思っていた場所に、相手の長いものを迎え入れる。

腰を振って、股間に力を入れてそれを挟み込み、自分の胎内で懸命に掴む。

上下に動かす度に擦れあい、自分の頭に電流が走る。これを続ける。

「あひぃぃ！！　いぃ！　いいのぉ！！」

本当に良かった。身体の熱さや疼きを忘れるほどに衝撃が走り続ける。

こんな事をし続けていれば、これから先どうなってしまうかなんて不安はこれっぽちもない。

「あ……」

しかし、突然全てが止まった。私を支配していた熱さや疼きは急速に消えた。

「あ、が……がぁ……」

苦しい。呼吸が出来ない程に苦しい。頭が割れるように痛み、全てに身を委ね、衝撃がこれから先も永遠に続いていくという安心感が音を立てて崩れ、不安と恐怖が私を一気に襲ってくる。

「う、あぁぁぁぁぁぁぁぁ！！　ぐぁぁぁぁぁぁぁ！！」

私は無様に涎を垂れ流し、獣のように吠えていた。

あらら、切れちゃったね。永遠に続く効果なんて無いのに。

いい気になってよがり狂ってたのが、今じゃこの有り様。

自分がどんな風に狂っていたのかさえ気にせずに、こうやって這いつくばって苦しむ。

「ば～かじゃないの？」

そう言ってやっても、この女の反応は変わらなかった。

自分を抱くようにしてガタガタと震え、薬、薬、と譫言のように呟いてる。

「そんなに、これが欲しいの？」

注射器を出してちらつかせてやると、反応は瞬時に変わった。

「あひっ！！　それぇ！　それちょうだいぃぃ！！」

なんて口の利き方を知らない女なんだろう。お願いすることも出来ないなんて。

「それ相応のお願いっていうのがあるんじゃないかな？」

「はひっ、なんでも！　なんでもしますからぁぁぁ！！」

一刻も早く手に入れたいのがよく分かる。試したことは無いけど、死んだほうがマシ。

そんな苦しみが襲うみたい。それと、全てを投げ出すような快楽との落差。

「ど～しようっかな～」

少しでも楽しもうと焦らしてやると、この女は頼みもしないのに、私の足を舐め始めた。

人間、ここまで惨めに堕ちるものなんだろうか、と驚いたくらい。

「お願い、ぺろ、しまふぅ！　ぺろぺろ」

正直、こんな下品な女の唾液で足を汚される事は耐えられないんだけど、まんざら悪くないじゃない。光もこうなるのかと思うと、私の身体は楽しさで打ち震える。

「……じゃあ、また狂っちゃいなよ」

今度は胸に突き刺してやる。瞬間にこの女は絶叫した。

「あひやぁぁぁぁぁぁッ！！　しゅ、しゅごいいいいいぃぃぃ！！」

全てを放棄した。その瞬間に、この女は全てが終わる。もう戻れない。

人間を辞めたら、もうあとは私の下僕として生きるしか無いのに。

「まあ、また新しい玩具が手に入ったと思えばいいよね」

光は風と共にノヴァと対峙していた。

「海ちゃんをどこにやったんだ！　答えろノヴァ！」

不敵に微笑むノヴァは、無数の下僕を引き連れていた。

そして、その手に持つ鎖には、同じような黒い人間の姿をした下僕がいる。

「どこにやったって言われても……あの女が自分から望んだことだし」

申し訳無さなどさらさら無いといった口調で、ノヴァは言う。

「それに、さっきから目の前にいるんだけど？」

ノヴァは手に持つ鎖を引っ張りあげた。下僕の首が引かれ、むっくりと立ち上がる。

「……？　目の前って、どういう事だ！」

「だから～、これよ」

黒い下僕の顔から、ゆっくりとその覆っていた影が引いていく。

「――！？」

光と風は驚愕した。

その影が引いた場所に現れた顔は、今まさに自分たちが探し求めていた仲間の姿。

「うふぁ……」

だらしなく崩れた表情に、かつての凛とした面影など微塵もない。

「ほら、自分で好きでこうなったの。入り口を作ったのは私だけどね」

「そんな……海ちゃん！　光だよ！　わからないのか！？」

叫ぶ声もまるで届かず、ノヴァの下僕と化した海はゆっくりと腕をあげ、その指先に伸びた鋭利な爪を見せつけるようにかざす。

それは海という存在の抜け殻だった。

「オマエタチ　ト　タタカウ　クスリ　モラエル……」

その下僕は涙を流しながら、そう言った。

23

今回の作品のサークルカット全体図となります

あとがき

レイアースは好きな作品でした。
オープニングの美麗さもさることながら、なによりコスチュームが良いですね。
当時の同人誌を何冊か持っていますが、一部を除いて殆どが裸や制服姿だったと思います。
あのコスチュームの魅力は海の股間にあるような気もします。
下地がレオタードなのではないか、と私は解釈していますが、違うかもしれません。
何にせよ、ノヴァというキャラクターが光の影という事で良い味をだしていましたよね。

今回の作品を検討するにあたり——
本当は光相手の方がノヴァも活き活きできたんじゃないかと思うんですが、どうしても海が好きで好きで……。
風ファンの方がいらっしゃいましたら、この場を借りてお詫び致します。
全く活躍がありませんでした。
申し訳ありません。

いずれ、以前出した愛天使本も含めて、活躍していなかったキャラクターを登場させようと思いますので、あまり期待せず、気を長くしてお待ち頂ければ……。

夏コミはマーズとヴィーナス本の予定です。
今回のCOMIC1が終わってもホッとは出来ませんね。
そちらもお楽しみ頂ければ幸いであります！

Presented by
堕落事故調査委員会
18歳未満の方の購入・閲覧を禁じます。